

図書館を語ること—根本彰先生御退任に寄せて

影浦峽[†]

[†] 東京大学大学院教育学研究科

図書館を語ること。

現実存在するものでありながら自然的実在とは異なり社会状況と認識に用いられる概念によって変質する可能性を常に伴う（とはいえその一部は自然的実在にも妥当しますが）対象を語るにあたって私たちが直面する困難は、例えば図書館史においてアレクサンドリアの図書館を持ちだした途端それがそもそも現在私たちが知っている図書館と「同一」であることがどのようなレベルでどのように保証されるのかという問いを喚起することからもわかるように遍在するにもかかわらずその問いを追求すると無限背進に陥る恐れがあるという意味で理論的にも方法的にも悩ましいものとして存在し続けています（その困難から目を逸らすことがもたらす帰結の一つが素朴な現場主義の過度な重視であったりするわけです）。

* * *

Patrick Wilson、『文献世界の構造』、『情報基盤としての図書館』、『場所』（「場」ではなく）としての図書館。根本先生のお仕事を考えたとき、これら4つのキーワード（および書籍タイトル）が自然に頭に浮かんできます。

『文献世界の構造』で扱われているテーマを関心領域として共有しながら根本先生とは異なるテーマを研究してきた私がその距離を敢えて意識的に利用し根本先生の緻密な御研究成果の一つ一つからは遠ざかりつつその巨視的な認識の展開を4つのお仕事の中に見るならば、そこに機能・理念をめぐる社会的実在を成立させる概念の系列と、組織・場所という現実の存在との間を行き来することで上に述べた困難を乗り越えつつ、抽象的な一般論でも現状追認の現場論でもない場所で図書館

を語ろうとする一貫した意志（ちなみにそのような意志は非常にしばしば主体の認識とは別に存在してしまうものなのですが）が存在していることを確認できるように思います。

図書館情報学という領域で活動する研究者が技術的なことも含め様々な個別研究をさほどその存立条件に気を配ることなくとも研究を行うことができてきたのは、根本先生の一連のご研究に後ろから支えられていたからだ、と、それほどの誇張なしに言うことができるかもしれません。

* * *

2005年秋に私が着任してから現在まで、とても快適な環境で研究教育活動を進めることができ、また、学部学生・大学院学生の環境もかなり良いものだったのではないかと思います。その多くは、根本先生の研究教育のお力、そしてコミュニケーションにも配慮しつつ正論をストレートに言う人格によるものだったと思います。ときにあまりに自由すぎる私の振舞いに対して、「ちょっとそれはまずいんじゃない」と指摘するときに見せる、とても嫌そうな（笑）、同時に少し困ったような表情は印象に残っています。民主的で紳士的、かつ論理的思考を重視する姿勢は、ともに働くにはとても快適なものでした。

根本先生の御退任後、どのような方を後任にお迎えしどのように研究室を運営していくかを考えたとき、予測される困難に圧倒されます。この困難はまた、図書館に関連する学界全体における根本先生の存在を映し出してもいるのでしょう。

東京大学の図書館情報学研究室に御着任からの20年間、そして私が着任してからの10年間、本当にどうもありがとうございました。